

長期避難者等の生活拠点の形成のための
「コミュニティ研究会（第2回）」
2013.9.2.

報告内容

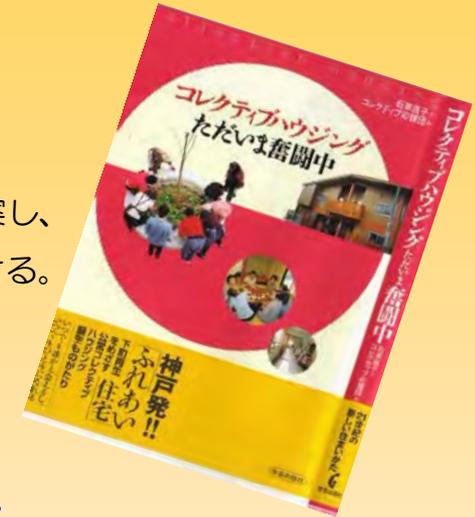
1. 阪神・淡路大震災の復興公営住宅における
コレクティブハウジング(ふれあい住宅)の推進について
「真野ふれあい住宅」等の検証
2. 暮らしを支えるソフト施策とハードのコミュニティスペースが
一体に整備された事例
「釧路町型コレクティブハウジング・ピュアとおや」
3. 県外避難者の癒しの場「みちのく だんわ室」の紹介

石東 直子（石東・都市環境研究室）

阪神・淡路大震災、東日本大震災後の主な支援活動

★ 1995年 阪神・淡路大震災 = コレクティブハウジング事業推進応援団 団長

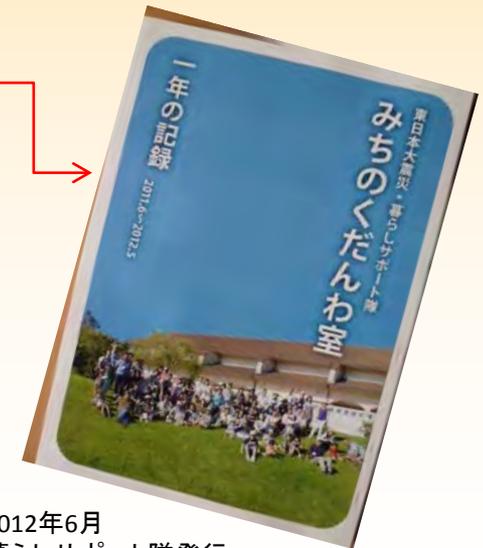
- ・復興公営住宅にコレクティブ住宅「ふれあい住宅=互助・共助の暮らし」を提案し、その事業化推進に向けての活動、および入居前と入居後の居住サポートをつづける。
 - コレクティブ住宅提案の発意
 - 仮設住宅応募に来られたおばあちゃんをつぶやきから
- ・全国初の公営コレクティブ住宅（兵庫県営、神戸市営、尼崎市営）が10地区341戸、事業化された。入居後は長期にわたって居住サポートを継続。
- ・2か所の復興公営住宅で「コミュニティ喫茶=ふれあい喫茶」の開催



2000年8月、
学芸出版社発行

★ 2011年 東日本大震災 = 東日本大震災・暮らしサポート隊 代表

- ・県外避難者の癒しの場「みちのくだんわ室」の開催
— /2011年6月から毎月の開催を続けている。
- ・宮城県亘理町の「仮設住宅コミュニティづくり住民集会」「復興住宅勉強会」の開催と継続支援。
- ・福島県いわき市中央台仮設住宅コミュニティづくりについて、地元の支援団体へのアドバイス支援
- ・宮城県多賀城市の仮設住宅の生活支援者への研修会の講師
- ・仙台市等での阪神大震災の教訓についての講演等



2012年6月
暮らしサポート隊発行

阪神・淡路大震災

震災復興公営コレクティブハウジング（ふれあい住宅）

入居から現在、そして今後の展開



2000年8月発行

発行所 学芸出版社

（現在は絶版。但し学芸出版社は電子
図書で公開している）

石東 直子

石東・都市環境研究室

コレクティブハウジング事業推進応援団

コレクティブハウジングってどんな住まい方

= 日常生活の中で自然な形で隣人たちがふれあって暮らせる住まい

★ いつでも誰かと会えるし、
いつでもひとりになれる

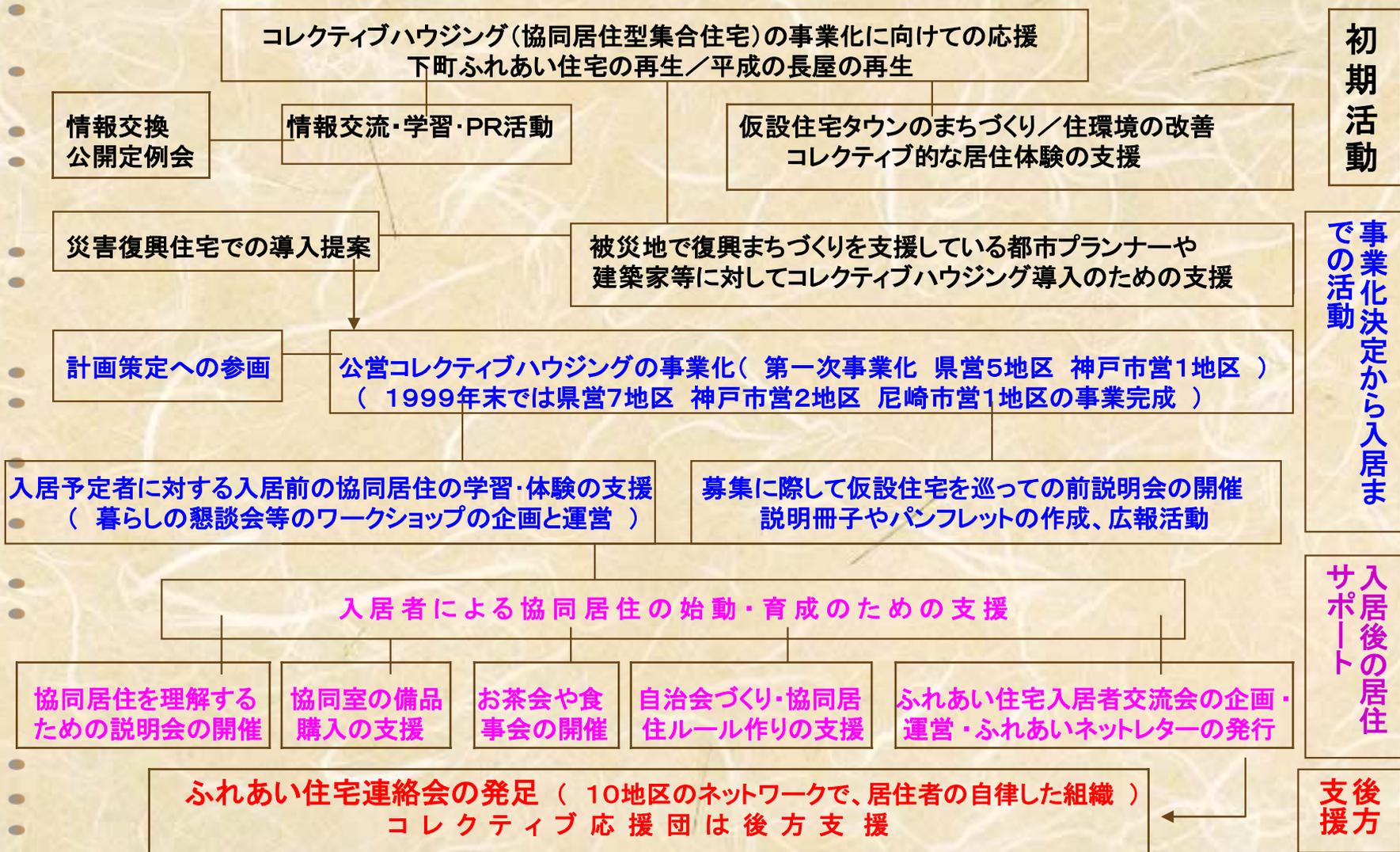
★ ひとりで食事をするよりも、
たまには大家族のように集まって食べよう

- それぞれの住宅は 少しコンパクトだが、台所、風呂、便所が備わった**独立した住戸**
- 各自の住戸の面積を 少しづつし出しあってできた**協同室**
- 協同室には 厨房コーナー、食堂・団らん室、和室などがあり、
自分たちの住宅のつづきとしての**共同の居間**のような位置づけ
- 協同室の光熱水費や清掃などの**維持管理**は 居住者たちがルールを決めて行う

阪神・淡路大震災 復興公営コレクティブ住宅(=ふれあい住宅)の事業化一覧 10地区341戸

供給年度	名称	戸数	構造・階数	協同スペース 面積 m ²	備考
1997	兵庫県営コレクティブハウジング 片山住宅	6	木造・2F	53	全戸シルバーハウジング 1DKのみ
	兵庫県営コレクティブハウジング 岩屋北住宅	22	RC造・3F	100	全戸シルバーハウジング 1DK 2DK
	兵庫県営コレクティブハウジング 南本町住宅	27	RC造・5F	173	全戸シルバーハウジング 1DK 2DK
	神戸市営 真野ふれあい住宅	29	RC造・4F	193	シルバーハウジング21戸 1DK 2DK 3DK
1998	兵庫県営コレクティブハウジング 大倉山住宅	32	RC造・4F	222	全戸シルバーハウジング 1DKのみ
	兵庫県営コレクティブハウジング 金楽寺住宅	71	RC造・4F	478	シルバーハウジング32戸、高 齢者特目住宅22戸 1DK 2DK 3DK
	兵庫県営コレクティブハウジング 福井住宅	30	RC造・3F	209	シルバーハウジング23戸 1DK 2DK 3DK
1999	神戸市営 久二塚西ふれあい住宅	58	RC造・7F	193	再開発受皿住宅(シルバーハ ウジングなし) 1DK 2DK
	尼崎市営 久々知住宅	22	RC造・4F	約200	全戸シルバーハウジング 1DK 2DK
	兵庫県営コレクティブハウジング 脇浜住宅	44	RC造・6F	280	全戸シルバーハウジング 1DK 2DK

コレクティブハウジング事業推進応援団の事業展開にそった居住サポート活動



初期活動

事業化決定から入居までの活動

入居後の居住サポート

支後援方

神戸市営コレクティブハウジング 真野ふれあい住宅 ②



▲長屋と路地が人と人のふれあいを育んできた真野



バルコニーの戸境板を取って路地を再現

どんな家をどんな風につくったんやろか？

「みんなで住もう！」という家から
 みんなが自由に意見を出し合う**ワークショップ**といっ
 やりかたでつくりました。(ふれあい住宅)には、みんなでご飯をつくる、
 みんなで食べるところや、路地のたまり場のようなところがあります。
 そんな場所をみんなで一緒に考えました。



▲ワークショップの様子

みんなの意見や提案を
 実施設計に向けて提言しました

まわりを開かれた住まい方って何やの？

(ふれあい住宅)には、つづきバルコニーや
 たまり場(会いの広場)があります。
 そこは路地のようなふれあいの場となり、
 近隣の人々が、ゆるやかに支えあ
 う住まい方が実現されます。



▲つづきバルコニーのイメージ



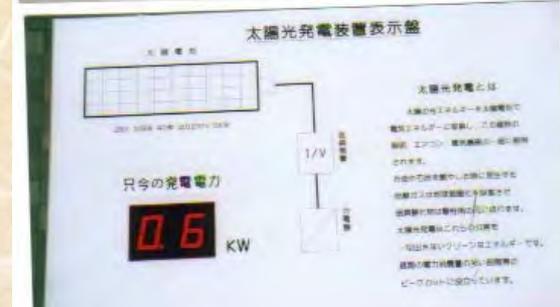
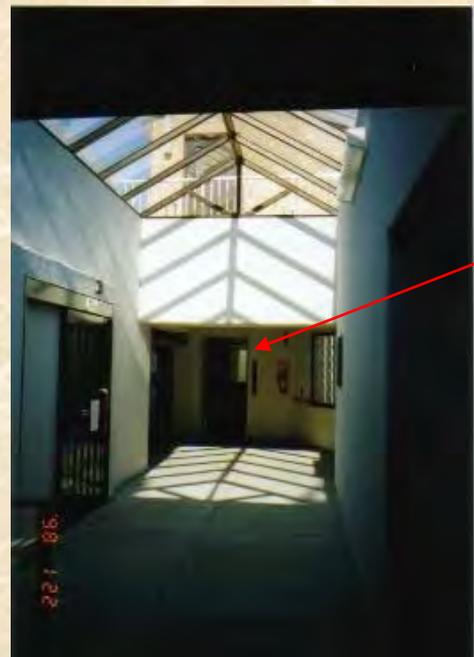
《会いの広場》
 近所の人たちとお茶を飲んだり、時にはご飯を食べたり、
 おしゃべりに花を咲かせたり・・・



神戸市営コレクティブハウジング 真野ふれあい住宅 ③

住戸の扉は防火ガラスの引戸
 → 夜、室内の明かりを感じる。
 右はエレベーター

屋上菜園



発電量メーター

神戸市営コレクティブハウジング 真野ふれあい住宅 ⑤



入居予定者たちの
入居前の協同居住の学習
ワークショップ



神戸市営コレクティブハウジング 真野ふれあい住宅 ⑥



入居直前の住宅見学



Aさん(中央)は入居時90才。4人とは仮設住宅で知り合い、グループ入居制度に応募して揃って入居。



協同居住のルールづくり・自治会規約づくりのサポート

神戸市営コレクティブハウジング 真野ふれあい住宅 ⑧



通りからも協同室の様子が伺える



居住者とボランティアスタッフで食事会の準備

地域の人たちを
招いた食事会



仲良しグループは
和室でほっこりと



各ふれあい住宅における多様なふれあい活動 2001年7月時点(入居後2～4年目)

久二塚西	<ul style="list-style-type: none"> ・総会と新年会、役員選出(年1回) ・協同スペースの大掃除、モーニングサービス、役員会(月1回) ・雛祭り食事会、端午の節句食事会、忘年会、臨時集会
片山	<ul style="list-style-type: none"> ・食事会(月1回) ・地域の人たちとの食事会(3ヶ月に1回) ・忘年会、新年会、雛祭り、クリスマス会、夏休み地域の子どもたちとの交流
真野	<ul style="list-style-type: none"> ・モーニングサービス(月2回) ・役員選出(年1回)
大倉山	<ul style="list-style-type: none"> ・各階食事会、1～4階の合同食事会、協同スペースの大掃除(月1回) ・朝食会(週1回) ・保健衛生講習会(年2回) ・夏祭り、敬老会、クリスマス会、餅つき大会 ・有志のボランティア活動(友愛訪問安否確認)
脇浜	<ul style="list-style-type: none"> ・全員集会(年2回) ・役員会(2ヶ月に1回) ・協同スペースの大掃除、お茶会(月1回)
南本町	<ul style="list-style-type: none"> ・総会と役員選挙(年1回) ・食事会、協同スペースの大掃除(月1回) ・ぜんざい会、節分豆まき、雛祭り、端午の節句、素麺大会、敬老会、クリスマス会、 ・有志のボランティア活動で1号棟と2号棟合同のお茶会(月3回)
岩屋北町	<ul style="list-style-type: none"> ・モーニング喫茶、デイサービス食事会、お茶会(週1回) ・新年会、地域の盆祭り、ビンゴゲーム、餅つき大会、地域の敬老会
福井	<ul style="list-style-type: none"> ・お茶会(月1回) ・ぜんざい会、雛祭り、七夕祭り、敬老会、クリスマス会
金楽時	<ul style="list-style-type: none"> ・各階食事会(年6回) ・喫茶(週1回) ・ふれあいコンサート、盆踊り大会、秋祭り、消防訓練、秋のクリーン運動、餅つき大会
久々知	<ul style="list-style-type: none"> ・総会、年期末臨時会合、1、2号棟合同会議(年1回) ・食事会(年3回) ・定例会、お茶会、手芸会、囲碁将棋会、健康相談会、カラオケ(月1回) ・新年会、春祭り、夏花火大会、敬老会、餅つき大会

神戸市営・再開発住宅のコレクティブハウジング 久二塚西ふれあい住宅 ⑦

再開発の受皿住宅のため、従前の地域コミュニティがそのまま引き継がれ、入居直後から自主的なふれあい活動が盛んに行われた。



58戸の協同室 奥に広めの厨房
右の壁には手芸クラブの作品展示



たまにはみんなで集まって食べよう 不定期の昼食会



4人合わせて333歳・忘年会



路地広場でのお茶会



忘年会

ふれあい住宅の検証 — 互助・共助が難しくなったいくつかの課題

① 10地区341戸が建設されたふれあい住宅は阪神大震災後の緊急な試みであり、全国初の事業化のために国の事業制度がなかったため、ほとんどの住宅はシルバーハウジング制度(1987年に元建設省と元厚生省が合同で制度化した施策。生活支援員つきの高齢者公営住宅)の活用で事業化したので、入居当初から高齢者の入居が多かった。

② 入居後数年を待たずして居住者の加齢による心身の弱化に伴って共助活動が困難になり、定例的な食事会やお茶会が中止されたり、節季の行事も少なくなりごみステーションや共同空間の清掃などを人材センターに外注するようになった住宅もある。

「互助・共助」を継続するための手立てがないので、このような状況に対しての対応策は住民まかせである。

☆☆ ふれあい住宅の入居後からしばらくは、その先進性が多くの自治体から注目され、視察者も少なくなかったが、「互助・共助を継続させる仕組みの欠落」について指摘されることはなかった。しかし現在、いくつかの自治体で事業化されている協同居住の住宅は、神戸のふれあい住宅の課題を教訓とし、互助の継続のための手立てを備えて事業化されている ☆☆

③ ふれあい住宅の空き家募集等の管理担当部局である自治体職員は2、3年で交代するので、ふれあい住宅の主旨を熟知しておらず、**募集に際してふれあい住宅の説明が正確になされない。**

また応募者の中にはサービス付き福祉住宅と思いきみ、入居当初から生活支援を必要とする人が入居して来て共助活動がますます困難になる。

④ ふれあい住宅の設計に関わった建築家や自治体職員は実際の暮らしに対して無知に等しく、**協同室や共同設備の維持管理費が高くなり、居住者が互助の活動を控えるケースも出てきた。** 例えば、協同室に大きなエアコンが複数台設置され、その電気代基本料金が電力使用料の多い業務用料金が設定されており電気代が高くつく。実際は全く使われたことのない共同洗濯コーナーなども設けられており、口径の大きな水道蛇口が設置され、水道使用量基本料金が高く設定されている。 実生活と合わない複数の協同室や2層吹き抜けで照明器具がセレモニー会場のような協同室、協同室の厨房スペースが小さすぎて使い勝手が悪い等々、日々の暮らしとその維持管理について無神経な男の視点での設計がなされている住宅が少なくない。

⑤ 2000年に制度化された介護保険制度の家事ヘルパーを利用する人が増え、個別対応のヘルパーが居住者の閉じこもりを誘引し、共助を阻む原因にもなっている。

居住者のこのような戸惑いに対しての相談窓口はなく、自治体もボランティア組織のコレクティブ応援団に期待していた。なお、コレクティブ応援団はコレクティブ住宅の事業の展開に添って必要な活動を展開してきたが、入居後のこのような個別の問題の対応には限界がある。

付 記：

阪神大震災の復興公営住宅・ふれあい住宅の整備後、全国のいくつかの自治体で同様の協同居住の公営住宅の事業化がなされたが、上記のような課題を教訓として、互助・共助の継続ができる手立てを備えて事業化されている。

その事例のひとつに「北海道釧路町型コレクティブハウジング・遠矢団地とピュアとうや」がある。

参考

ふれあい住宅の課題対応の各住宅の状況

- ① 入居して10年前後になり、居住者の加齢がすすみ体力的なしんどさから、入居当初に行われていた協同室での多様なふれあい活動(モーニングサービス、食事会、その他等)を、ほとんどの住宅が中止、縮小している。
- ② ふれあい住宅の居住者独自で活動(催し)ができなくなるが、外部サポートの導入については、各住宅の想いは一様ではない。

積極的に導入してうまく活用

- 自治会長の熱意と奮闘が大
(福井ふれあい住宅は自治会長夫妻の献身的な活動に負うところが大きい)。
- 地元自治体のコミュニティ育成のための施策が活用しやすい(福井ふれ住)。

外部サポートの導入

導入を拒否

- 久二塚西ふれ住は、下町暮らしで近隣との助け合いの中で生活してきたので、外部に対して閉鎖的である。加齢により相互扶助に限界があるという現状をなかなか理解できない(認識できない)。

独自で導入を積極的に検討しようとはしていない。が、地域の活動に参加している

- ふれ住の入居当初の理念に固執し(とどまったままで)、居住者全員参加でやるべきだが、居住者の状況変化によってできなくなったとを悔やんでいる。小人数グループの活動をなかなか容認できない。
- 岩屋北町ふれ住は独自の活動はできないが、地域の活動が多々あり、それに参加するようにしている。

シルバーハウジングのLSAが、LSA活動としてサポートしている。

- 住人は成り行きに任せたままで、LSA支援を受けるにとどまる(真野ふれ住)。

福井ふれあい住宅では、
民生委員の音頭で、
2006年7月から地域住民
による「ぐるーぷ なか」
を結成し、月に1回の喫
茶「ほんわか」を開催。
2008年3月から食事会
「一日ゆったり会」の開催
と参加できない人に安否
確認を兼ねて食事の宅
配も。地域にもオープン
なので、地域とのつなが
りも途絶えない。



阪神大震災・コレクティブ住宅
(ふれあい住宅)



誰もが集える場を

福井コレクティブ住宅
◎兵庫県営福井鉄筋住宅
(兵庫県宝塚市)

兵

庫県営福井鉄筋住宅
は、阪神・淡路大震

災によって兵庫区内、または大阪府内の仮設住宅で生活していた住民たちが移り住んだ復興公営住宅だ。抽選で決まった入居のため、入居者同士のなじみが薄い。校区内のまちづくり協議会主催の食事が町内の会館であるからと、顔なじみの民生委員に誘われて参加しても、もともと暮らし



一日ゆったりの会に集まり、食事をしながら会話を楽しむ

ていた地域ではないため、知り合いも少なく、2、3回の参加しかできない。地域の福祉ネットワーク会議にも呼びかけられたが、やはり参加しにくく、孤立してしまうという状況に陥っていた。
この現状を受け、立ち上がったのが民生委員だ。復興公営住宅の住民からの参加が難しいのなら、地域か



一日ゆったりの会で行われた伝統舞踊

ら出向き、復興公営住宅の集会所で喫茶を開こう。地域住民が集まり、ボランティア「ぐるーぷ なか」を結成、喫茶の計画をすすめた。誰でも自由に参加できる100円喫茶を開催すれば、近隣とのふれあいも生まれる。民生委員として、復興公営住宅の訪問をしていたため、住民と顔見知りであったこと、担当の社協職員の応援や、なにより、集会所や談話室といった広い場所があったことが、喫茶の開催を後押しした。復興公営住宅の自治会長ご夫婦も交えた協議を重ね、2006年7月に「喫茶ほんわか」がオープン。喫茶ほんわかには、月に1回、13時半から15時半の間で行

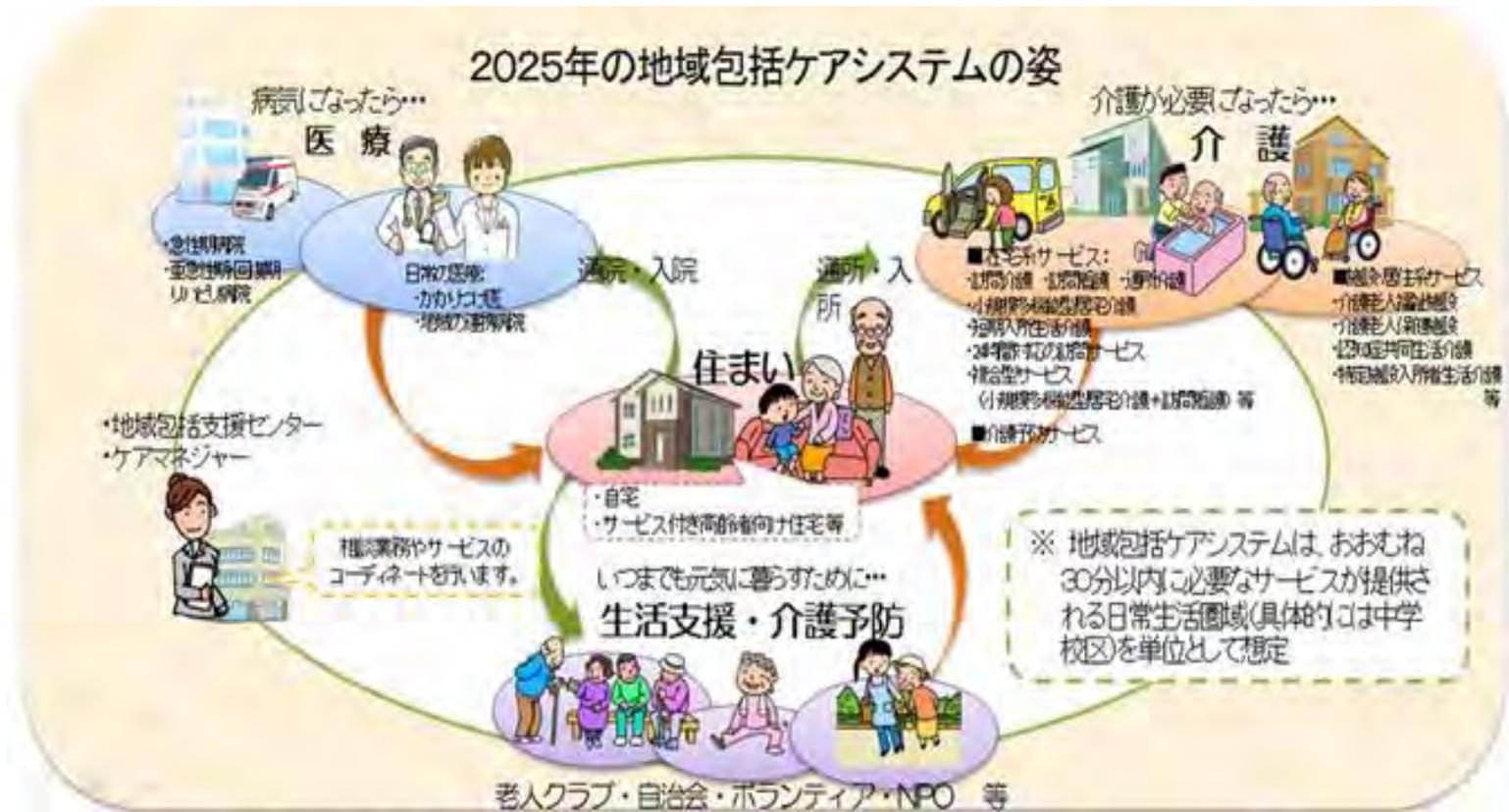
われ、暮らす場所に関係なく、誰でも集まれる場所として口コミで徐々に広がった。
2008年3月からは、一緒に食事を楽しもうと、食事会「一日ゆったりの会」を開始。食事会に訪れることができない人には、安否確認を兼ねて自宅へ食事を届け、その際に会話を楽しんでらると、地域とのつながりが途絶えないよう、配慮している。

「ぐるーぷ なか」の活動は、既存の場所を利用したこと、誰もが集いやすい場となり、かつ、復興公営住宅に暮らす住民だけでなく、地域全体での支援ととらえたことによって、孤立していた復興公営住宅の住民と地域をつないだ。



地域包括ケアシステムとは

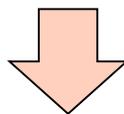
高齢者が尊厳を保ちながら、重度な要介護状態となっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう、**住まい、医療、介護、予防、生活支援が、日常生活の場で一体的に提供できる地域での体制**



互助の取り組みへの期待

地域包括ケア実現には、地域の「自助、互助、共助、公助」の役割分担を踏まえながら、さまざまなサービスが有機的に連動して提供されるシステム構築の検討が必要

- ・近年、孤立死、孤立化の問題や買い物難民等が社会問題化
- ・今後、認知症高齢者の増加、単身・夫婦のみ世帯の増加等、支援を必要とする高齢者は増加
- ・家庭や地域の力はますます低下することが懸念されている



地域の様々な主体(ボランティア、NPO、社会福祉法人、企業、自治会、老人クラブ等)が、地域の力で高齢者を支えていく互助の取り組みが特に重要

① 釧路町型コレクティブハウジング、「ピュアとおや」

新たな公営住宅を「釧路町型コレクティブハウジング」として整備し、地域福祉と交流の拠点「ピュアとおや」を併設

- ・ 高齢者と若い家族、共働きなどさまざまな世帯が交流できる住まい方「コレクティブハウジング」として、公営住宅の範囲の中で、「協働」や「自助・共助」の理念に基づき、多世代間コミュニケーションを図り、地域を含めた支え合い、助け合いの結びつきのある住まい方を目指している。
- ・ 地域福祉と連携して、誰もが安全・安心して暮らせる環境づくりを図り、また福祉サービスと地域交流の機能をもつ団地内のふれあい交流空間を地域住民にも開放することで、いろいろな世代の交流やふれあいを生み出し、地域全体で暮らしを支える体制づくりを目指している。
- ・ 既存の住民組等が形成されていない新たな公営住宅・施設づくりにおいて、行政による住民参加のソフト面の働きかけにより、周辺地域を含む住民間の互助による見守りや生活支援サービスの提供、介護保険サービスの運営主体の立ち上げを誘導している。

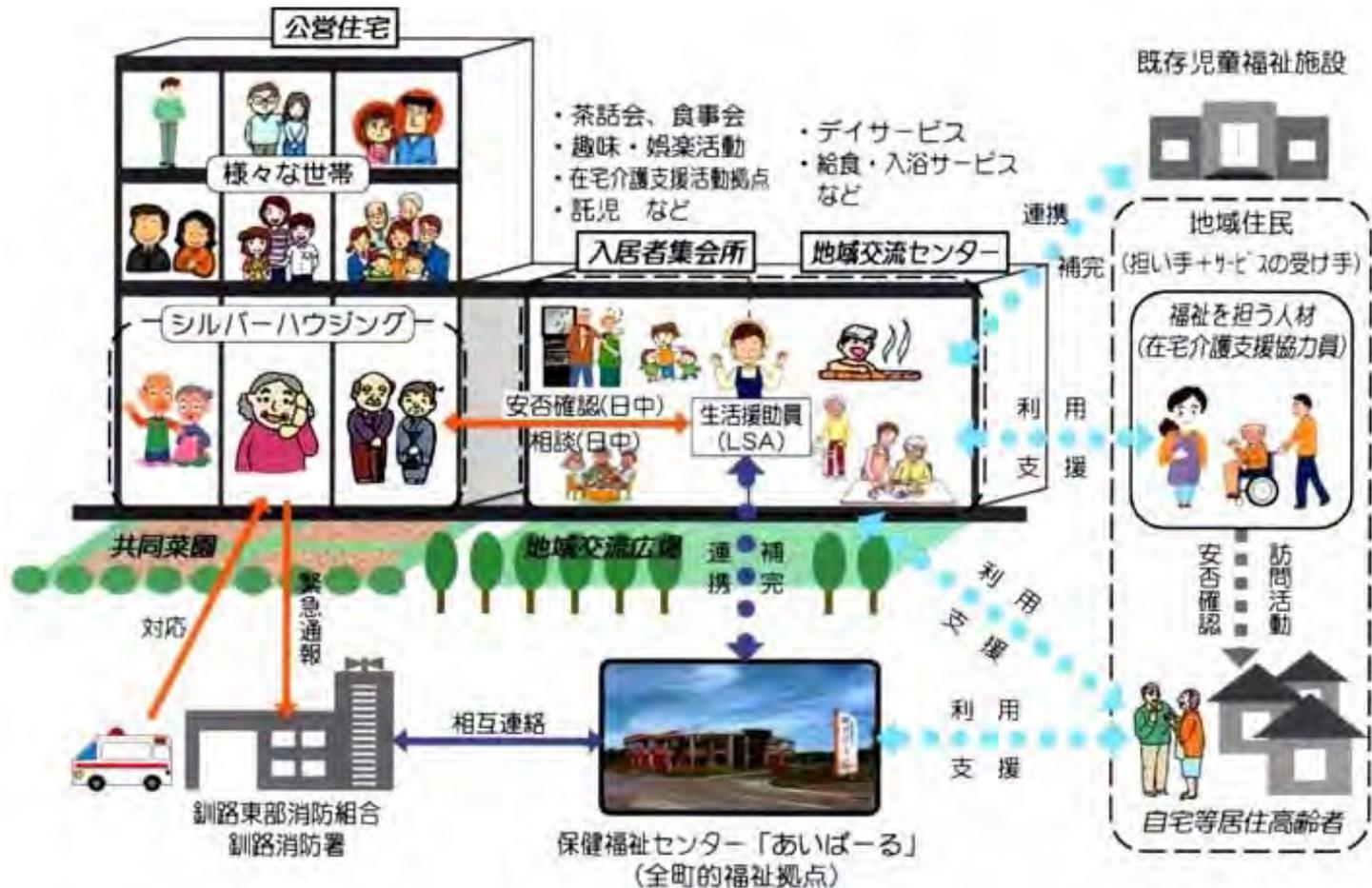
参考引用資料:「住まいから始める地域・まちづくり 2008/

豊かな住まい・まちづくり推進会議、公共住宅事業者等連絡協議会発行」

① 釧路町型コレクティブハウジング、「ピュアとおや」

新たな公営住宅を「釧路町型コレクティブハウジング」として整備し、地域福祉と交流の拠点「ピュアとおや」を併設

【釧路町型コレクティブハウジングのイメージ】



事業全体の概要

【遠矢団地】 H18.10～入居

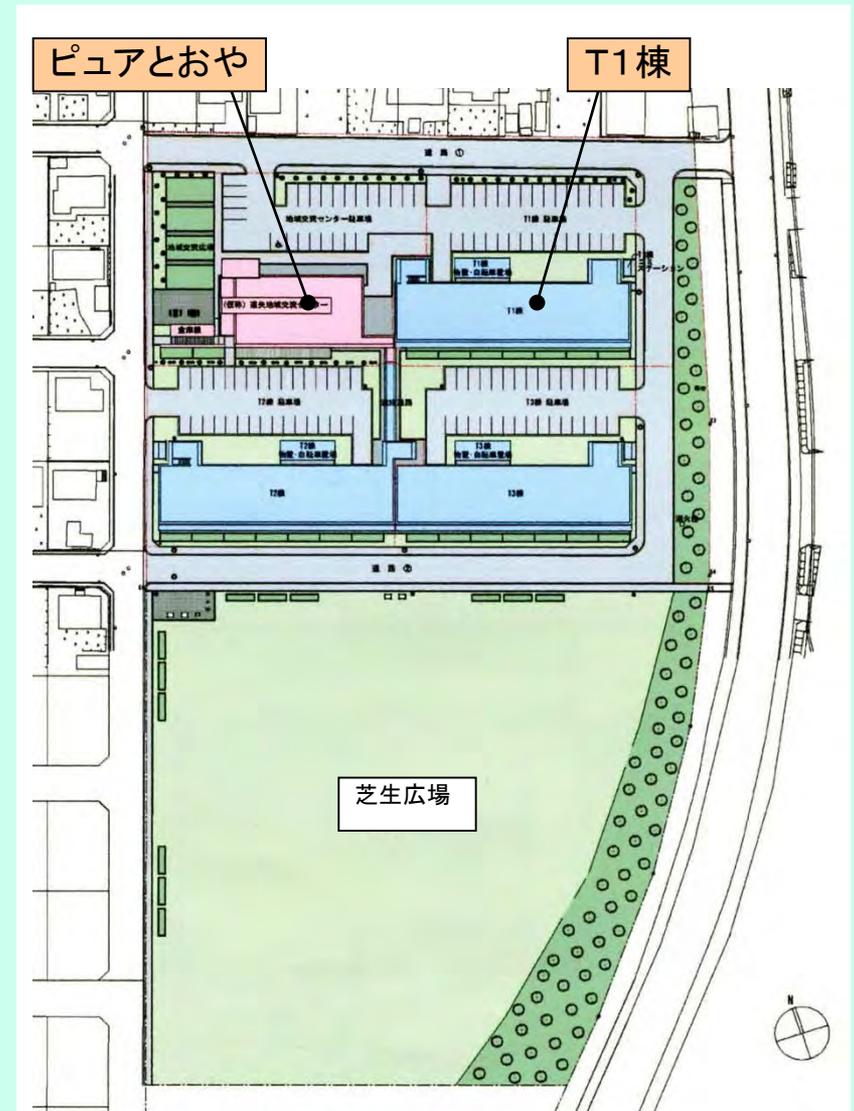
- ・公営住宅60戸（一般世帯向け42戸、シルバーハウジング18戸）。

【ピュアとおや】 H18.9開設

- ・地域住民により設立されたNPOが、在宅高齢者サービス事業、地域交流事業等を実施。

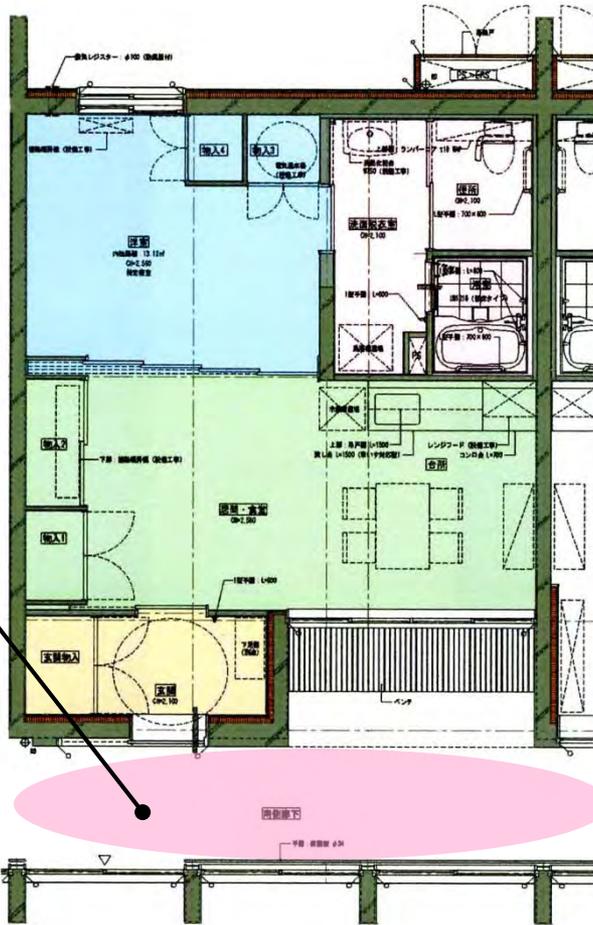


団地全体構想図（北西側パース）



シルバーハウジング住戸

南側共用廊下
で縁側のように
コミュニティ
形成を図る



1LDK-S



コレクティブハウジング模擬事業等(第1期分)

- 入居1年前に入居希望者を登録(71世帯が登録)
- 「コレクティブハウジング模擬事業」を3回実施
 - *コレクティブハウジングについて・事業趣旨説明、食事会、共同花壇整備
- コレクティブハウジング入居者募集(35世帯が申し込み)→入居者決定



模擬事業のワークショップ



入居決定者による住棟前花壇の整備

遠矢団地のコミュニティ形成の状況

●南側共用廊下の効果

- ・日常的に縁側のように利用、防犯性の高まりにもつながっている。

●居住者の交流活動

- ・入居時には顔見知りで新たな生活になじみやすい。負担にならない範囲で自分たちが楽しむ方針で、自治会主催の新年会、焼肉パーティ、敬老会等を開催。

* 2期募集(H20)の模擬事業は、1期入居の住民がWS運営を担う



共同菜園の収穫祭



新年会

「ピュアとおや」での開設前の取り組み

人材育成事業（下記の内容はH17年度）

- 在宅支援サポーター養成事業
 - ・全7回、参加者14名
- 在宅支援サポーター養成特別講座
 - ・全2回、NPO法人の設立を目指して開催
- センター活用模擬事業
 - ・地域に密着した福祉の展開準備として養成講座受講者の実践事業を実施（介護予防講座、コミュニティ食堂等）
 - ・全3回、各回50人前後が参加



H16・17年度受講者有志がH18年にNPO法人「ゆめのき」設立

①大阪府営住宅「ふれあいリビング」

阪神淡路大震災を契機とし、高齢化の進む府営住宅で共生型居住を実現していくため、居住者と協議しながら集会所型の「ふれあいリビング」を提供

- ・大阪府が集会所を増設または改修
- ・施設内容や活動・運営は住民が運営組織を構成し、大阪府と協議しながら取り組む。常設のふれあい喫茶の他、地域の実情に応じた多様な活動を実施。
- ・H22年度までに26団地で提供

年度	整備団地	整備方法
H11・12	下新庄、金岡東第4、高槻五領	モデル事業、増設
H16	寝屋川三井、東大阪玉串、交野梅が枝	既存集会所の改修
H17	寝屋川御幸西、清滝、和泉北信太	同上(以下同様)
H18	高槻芝生、堺高松、岸和田春木	
H19	貝塚半田、焼野、岸和田荒木	
H20	藤井寺道明寺、東大阪吉田、堺福田、松原一津屋	
H21	寝屋川打上、桃山台1丁、楠風台	
H22	高倉台第1、貝塚久保、貝塚三ツ松、寝屋川仁和寺	

大阪府

<コーディネーター> コミュニティ活動を支援

居住者

企画

計画・設計

工事

ステップ1
活動や集会所の状況を把握

ステップ2
協議・検討する体制をつくる

ステップ3
整備条件を整理する

ステップ4
整備計画を検討する

ステップ5
設計

ステップ6
工事

アンケート、ヒアリング

参加・協議

連携した検討、協議

要望の整理

計画提案・協議

設計提案・協議

アドバイス、情報提供等の
支援

検討の準備
・情報収集
・検討体制づくり

活動イメージづくり、
運営の基盤となる
組織の確立

具体的な活動内容
や運営の詳細検討

ふれあいリビングがオープン！

事例 大阪府営交野梅が枝住宅「梅の郷」

- ・H16年度改修整備
- ・大阪府が倉庫をキッチンに改修(改修費800万円)
- ・自治会が床やテラス改修(90万円)、備品は寄贈等



活動の継続(8年)、広がり

- ・週3回「ふれあい喫茶」開設。1日約50人利用。運営は住民ボランティア。
- ・自治会登録団体のサークル活動に活用し、活発な利用。
- ・市の福祉部門と連携し、社協による「福祉なんでも相談」(週1回)、保健師による健康相談(月1回)を実施



「県外避難者の癒しの場・みちのくだんわ室」の開催

- ・癒しの場の提供と避難者のネットワークづくり
- ・2011年6月スタート、毎月開催。
- ・2013年7月で参加登録者は 90組 224人
 延べ参加者数は 928人
 延べ参加スタッフ数は 312人

2周年記念・みちのくだんわ室
 100人大家族の協同の居間
 2013年5月12日 神戸港クルーズ
 東日本大震災・暮らしサポート隊



暮らしサポート隊 HP
http://www.geocities.jp/kurasapotai/0_home.html

東日本大震災の「みなし仮設入居者」の癒しの場の提供とネットワーク化が望まれる

みちのくだんわ室 開催一覧

2011年6月～
2013年7月

この頁は、
後に同じ資料をA4版で
綴じています

回数	日時	場 所	参 加 者		備 考
			(子ども)	スタッフ	
2011年					
1	6月4日	しあわせの村	38(16)	16	歓迎ピクニック
2	7月11日	三宮ターミナルホテル	49(20)	15	神戸のお菓子とパン、ホテルのコーヒードキ
3	8月7日	神戸花鳥園	29(9)	13	花々の中、鳥と遊ぶ
4	9月10日	淡路景観園芸学校	45(18)	10	明石海峡大橋を渡って淡路島バスツアー
5	10月16日	UCCカフェコンフォート	39(15)	17	六甲山と瀬戸の海を眺望・24階の展望喫茶で
中止	11月19日	しあわせの村 /大雨で中止			当日中止
6	12月10日	磯上邸パーティールーム	53(28)	13	豪華なパーティールームでクリスマスコンサート
2012年					
7	1月21日	赤坂飯店Tio舞子	29(9)	17	明石海峡大橋のたもとで 中国茶と点心
8	2月18日	元町・パレス神戸ホテル	36(13)	16	和室でゆったり談話
9	3月17日	淡路島・奇跡の星の植物館	41(17)	12	淡路島バスツアー 植物園でのアトラクション
10	4月14日	しあわせの村-バーベキュー	49(20)	16	神戸中央卸売市場の新鮮食材提供の大バーベキュー
11	5月12日	明石城址公園	27(8)	16	明石名物「たご焼き」と散策
12	6月24日	コープこうべ生活文化センター	60(24)	19	1周年記念パーティー ミニコンサートと大道芸
13	7月28日	岡本一シェ・ドック	14(5)	8	音楽療法士の音に包まれて
14	9月2日	舞子海上プロムナード	38(16)	11	海上散策と海上レストランでの談話
15	10月14日	明石城址公園-刀削麵	54(24)	18	福龍門さんの刀削麵の実演でいただく
16	11月23日	兵庫県立美術館	15(3)	9	文化の秋は芸術鑑賞とティタイム
17	12月16日	ホテルクラウンパレス神戸	63(30)	16	クリスマスパーティー・ マリンバ演奏と女性アンサンブル
2013年					
18	1月13日	赤坂飯店Tio舞子	42(16)	6	明石海峡大橋のたもとで 中国茶と点心
19	2月18日	神戸中央卸売市場料理教室	30(12)	15	参加者の獅子の解体ショー 獅子のしゃぶ他ご馳走づくり
20	3月17日	有馬富士公園と県立人と自然の博物館	45(21)	11	早春のバスツアー 三田へ
21	4月21日	芦屋一木口記念館 一般参加(映画)6人	19(4)	11	談話の後、選択メニューで。あしや温泉の足湯/映画鑑賞「内部被ばくを生き抜く」
22	5月12日	神戸港クルーズ	56(27)	10	2周年記念 コンチェルトで夕暮れのクルーズ
23	6月23日	神戸市立小磯記念美術館	22(4)	8	六甲ライナーに乗って、美術館へ
24	7月28日	神戸市立六甲山牧場	35(15)	9	六甲山へのバスツアー
25	9月8日	神戸市立王子動物園			
		参加者の合計 928人 (大人・554 子ども・374)			参加スタッフの合計 312人

☆ 安心して暮らせる避難者向け復興公営住宅の建設についての提案 ☆

この頁は、
後に同じ資料をA4版で
綴じています

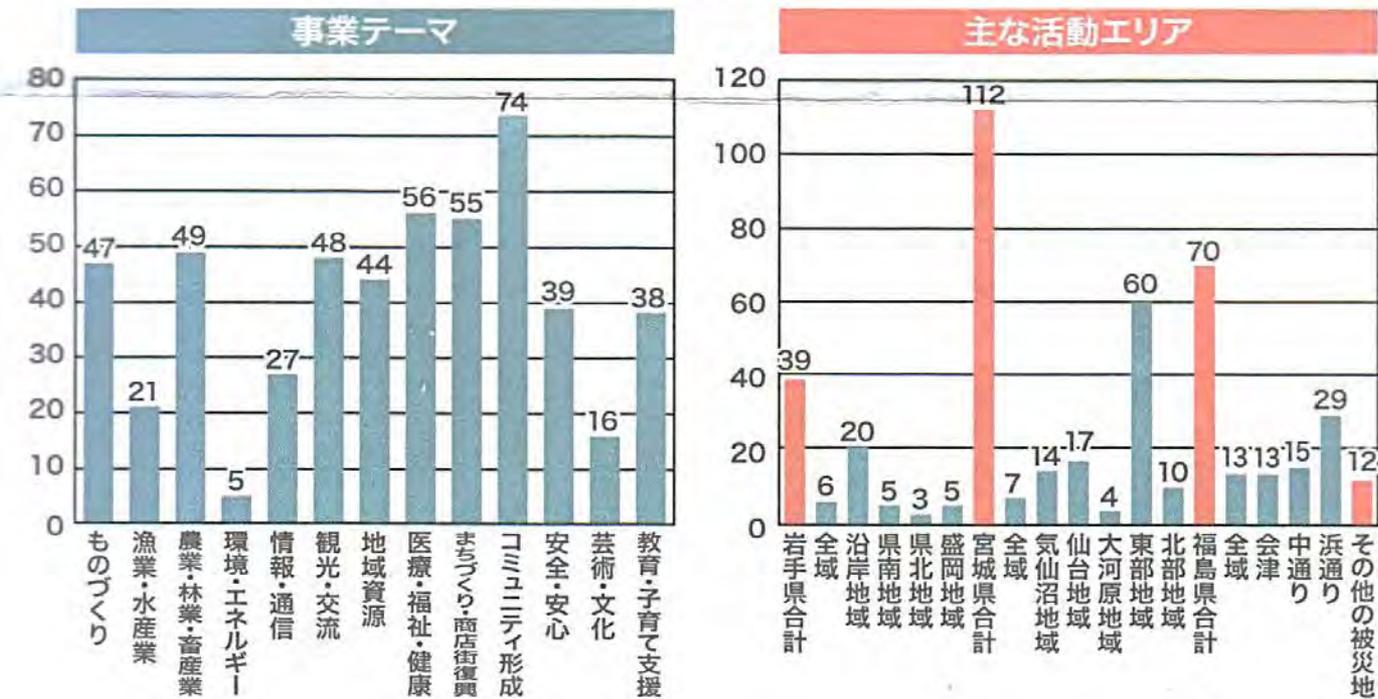
1. 居住者(避難者)参画の住まいづくりのWS(ワークショップ)をもってほしい
 - 入居後の自主的なコミュニティづくりに結び付く
 - 必要とされる、暮らしを支えるソフト施策の内容が明確になる
 - 暮らしに根差した、使いやすく、無駄な維持費がかからないコミュニティスペースの計画に結びつく
 - 互助・共助が育まれやすい
 - 復興公営住宅地、地区の自主的な運営管理の芽が育つ
2. 当面の入居者は中高年層が中心となると予想されるので、特に高年者の閉じこもりを回避できるようなハードの作り方とソフトサポートの両面を当初から考慮する
 - 閉じこもりを防ぐような外に開かれた住戸の設計(間取り)の工夫
 - 外に出てみたくなるような、快適な住宅地区全体の計画(空間構成)
 - 大家族の共同の居間のような、厨房を備えた大きな団らん室の設置
 - 互助と共助による隣人のふれあい促進のためのソフト施策の工夫
3. 子どもや孫世帯が訪ねて来て(帰って来て)、宿泊できるような施設の設置
 - 住宅地区の共同宿坊のような、居心地の良い宿泊施設
 - 可能なら一定の空住戸(予備住戸)を確保し、普段は別用途に使用も可能(ex. 緊急時の支援者宿泊住戸)
4. 住いのつづきとしての快適な屋外空間、共有スペースづくり
 - 共同菜園や共同花壇
 - 例えば、中庭や東屋(共同の居間、団らん室など)を囲んだ住戸の配置
5. 入居者の特技(職歴や得意技)を生かし、居住者自らの地域生活への参画
 - ワーカーズ・コレクティブ(有志による有料ボランティア)による食堂経営や宅配の食事、お惣菜店、喫茶店、日常必需品の販売店舗など → 事例はたくさんあります
 - 趣味の手仕事作品、自作野菜などの販売店舗の共同運営など
6. 受け入れ自治体の地域コミュニティのホスピタリティの育成
 - 避難者から地域コミュニティに融合していくことは、感情的にやや難しいと思われる。
 - 従って、地域コミュニティの社会福祉協議会、自治会や子供会、ボランティアグループなどが手を差し伸べてほしい。
 - そのようなホスピタリティを育むための情報交換会、学習会、広報活動、イベントの開催などを、まずは 公的機関が行ってほしい。
7. 地域にある既存の民間施設などのストックも活用(ex. コンビニや食堂のお惣菜の宅配、商店の定期的な移動店舗の開催など)

阪神・淡路大震災はボランティア元年といわれ、NPO法も創設され、その後、NPOや非営利活動組織による活動が活発になった。東日本大震災では、個人やNPOによる「起業」が育ち始めた。

復興支援型地域社会雇用創造事業は、被災地で新たに社会的事業を開始する起業家・企業に対して300万円を上限に支援を行ってきた。事業テーマは**コミュニティ形成、医療・福祉・健康、まちづくり・商店街復興、農業・林業・畜産業**などが多い。復興公営住宅の安心した暮らしの仕組みづくりに参画し、暮らしのソフトサポートの事業化の可能性が大きいと思われる。

「内閣府 復興支援型地域社会雇用創造事業」
被災地の社会的起業家600人
ウェブサイトで公開開始

内閣府事業で生まれた事業の分布(n=234, 複数回答)



資料出典：
「東北復興新聞 第24号」
2013. 05.27.発行

仕事による生きがい活動と拠点の自立運営の可能性



仮設住宅のプランターで育てられた
見事な野菜



女川町の仮設住宅の東屋で見かけた
干し魚

ご清聴 ありがとう ございました。

石東 直子(石東・都市環境研究室)

☆ 安心して暮らせる避難者向け復興公営住宅の建設についての提案 ☆ 石東 直子
2013.09.02.

1. 居住者(避難者)参画の住まいづくりの WS(ワークショップ)をもってほしい
 - 入居後の自主的なコミュニティづくりに結び付く
 - 必要とされる、暮らしを支えるソフト施策の内容が明確になる
 - 暮らしに根差した、使いやすく、無駄な維持費がかからないコミュニティスペースの計画に結びつく
 - 互助・共助が育まれやすい
 - 復興公営住宅地、地区の自主的な運営管理の芽が育つ

2. 当面の入居者は中高年層が中心となると予想されるので、特に高年者の閉じこもりを回避できるようなハードの作り方とソフトサポートの両面を当初から考慮する
 - 閉じこもりを防ぐような外に開かれた住戸の設計(間取り)の工夫
 - 外に出てみたくなるような、快適な住宅地区全体の計画(空間構成)
 - 大家族の共同の居間のような、厨房を備えた大きな団らん室の設置
 - 互助と共助による隣人のふれあい促進のためのソフト施策の工夫

3. 子どもや孫世帯が訪ねて来て(帰って来て)、宿泊できるような施設の設置
 - 住宅地区の共同宿坊のような、居心地の良い宿泊施設
 - 可能なら一定の空住戸(予備住戸)を確保し、普段は別用途に使用も可能(緊急時の支援者宿泊住戸)

4. 住いのつづきとしての快適な屋外空間、共有スペースづくり
 - 共同菜園や共同花壇
 - 例えば、中庭や東屋(共同の居間、団らん室など)を囲んだ住戸の配置

5. 入居者の特技(職歴や得意技)を生かし、居住者自らの地域生活への参画
 - ワーカーズ・コレクティブ(有志による有料ボランティア)による食堂経営や宅配の食事、お惣菜店、喫茶店、日常必需品の販売店舗など →事例はたくさんあります
 - 趣味の手仕事作品、自作野菜などの販売店舗の共同運営など

6. 受け入れ自治体の地域コミュニティのホスピタリティの育成
 - 避難者から地域コミュニティに融合していくことは、感情的にやや難しいと思われる。従って、地域コミュニティの社会福祉協議会、自治会や子供会、ボランティアグループなどが手を差し伸べてほしい。そのようなホスピタリティを育むための情報交換会、学習会、広報活動、イベントの開催などを、まずは福島県や自治体が行ってほしい。

7. 地域にある既存の民間施設などのストックも活用
 - コンビニや食堂のお惣菜の宅配、商店の定期的な移動店舗の開催(地域住民との融合効果も)

毎日新聞 2012.8.17.

震災特集

みちのくだんわ室

東日本大震災後、関西圏へ避難してきた人たちの交流の場となってきた「みちのくだんわ室」の取り組みが2年目に入った。都市プランナーの石原直子さんから阪神大震災の経験者を中心となり、神戸市周辺で月1回のピクニックや食事会などを行ってきた。参加者は子どもからお年寄りまで約150人、60家族に上り、情報交換や避難生活の悩みを共有する場として毎回参加する人が多い。

【関西報、写真も】

「阪神」経験者らが企画

「大きくなったんや」と、初めて来た時は、神戸市東灘区で6月24日に開かれた1周年記念のだんわ室。31家族65人が参加し、お茶ありがとうございま」とケーキを喜びながら

避難者に癒やしを

お互いに悩み話すことが大切

だんわ室を企画した石原直子は「グリーフ（悲嘆）ケアは外からではできない。お互いに分かちあえる人同士が、悩みや近況を話すことで、少しづつ癒やしは小さくならない」と言う。

石原さんは阪神大震災後、仮設住宅支援のボランティアで高齢者が孤独死するケースを目の当たりにし、災害時のコミュニティの重要性を痛感。北阪で普及していた、台所などの共用スペースを持つ集合住宅「コレクタティブハウス」を兵庫県などに提案し、復興住宅10回地計34戸で実現させた。

月1回 ピクニックや食事会

被災地に向かった。しかし、04年に胃がんの手術を受け、体力が低下していた石原さんは現地で支えを断念せざるを得なかった。

「一回関西でできることを。当時、福島第一原発事故で西日本に避難してきている母子などの報告が相次いでいた。生活物資の提供は行政や多くの市民団体が始めていたが、阪神大震災で孤立した住居を多く見てきた経験から、グリーフケアが必要と感じた。

昨年3月末、知人らとボランティアグループ「暮らしサポーター隊」を結成。だんわ室を企画したが、当初は個人情報保護の観点から、市役所は避難者の



だんわ室の談笑風景。スタッフも加わらず避難者だけで時間を共有する
—神戸市東灘区で6月24日

参加者は世代で参加する家族から、単身者までさまざま。震災前の居住形態も、東京都などからの自主避難も含めて都県に上る。

「福島県三町出身の女性30は当初、福島を離れる気が無かったが、大阪府出身の夫との結婚を機に兵庫県西宮市に引っ越した。関西になじめず、何度も帰りたいと思ったという。

だんわ室への参加は今年4月から。「なかなか家から出られなかった。避難者の集いは他にもあるが、そこへの一歩が踏み出せない。だんわ室は世代や家族構成もさまざま参加しやすいかった。地元の人と会うと、やっぱりほっとする」

記録誌まとめる

県外避難者の実態を知ってほしいと、サポーター隊はだんわ室の1年と参加者それぞれの避難の軌跡、関西圏での生活などを聞き取った記録誌をまとめた。写真、記録当日の様子など生々しい証言

が、本人が執筆した手記も含め22人分掲載されている。福島県会津若松市から神戸市東灘区に避難した30代の女性は「震災と原発事故の経験を自分が忘れてしまうこと、社会から忘れられてしまうことの両方が怖い。記録に残してもらえてありがたかった。関西で過ごしたこの1年は、多くの経験をさせてもらったような気がする」と話した。

記録誌は1冊3000円。次回のだんわ室は9月2日、神戸市東灘区舞子町の舞子海上フロムナード展望ラウンジで、問い合わせや参加希望は、連絡先の電話番号を記入の上、郵送で事務局（〒655-10046 神戸市東灘区舞子台7-1-4の305）へ。



被災地を離れ、疲れピーク

避難ストレス 海で癒やして

神戸の支援団体企画



東日本大震災

港クルージング参加呼び掛け

暮らしサポート隊は現在、まちづくりの専門家や学生ら約10人で構成。2011年6月、孤立しがちな避難者が語らい、情報交換する「みちのく談話室」を開催して以来、毎月1回、神戸市内や淡路島のレストラン、観光地など、くつろげる場で集いを開いてきた。

参加者は2年間で85家族、延べ800人。高齢夫婦や一人暮らしの男性のほか、原発事故で避難した子連れの母親が半数を占め

料。定員50人(先着順)。申し込みは7日まで。石東さん ☎078・781・1170

東日本大震災の被災地から兵庫県内へ避難している人たちに集いの場を提供している市民グループ「暮らしサポート隊」(神戸市)が設立2周年を記念し、神戸港クルージングを企画した。代表の石東直子さんは「神戸の魅力を感じ、日ごろのストレスを発散して」と避難者の参加を呼び掛けている。

(木村信行)

「入園や入学など新たな課題に直面し、疲れている避難ママは多い」と石東さん。

12日は午後4時、JR神戸駅中央改札南口に集合。観光船コンチエルトに乗船し、生演奏を聴きながら夕暮れと夜景を楽しむ。株式会社コンチエルトが協賛。

子連れでも可。参加費は大人500円(子どもは無料。定員50人(先着順)。申し込みは7日まで。石東さん ☎078・781・1170

東日本大震災の避難者ら クルーズで交流深め

神戸

東日本大震災の被災地から兵庫県内に避難し

ている人たちが12日、神戸の支援団体の企画で、神戸港クルージングを満喫しながら交流を深めた。

県内の避難者に集いの場を提供してきた神戸の市民グループ「暮らしサポート隊」(石東直子代表)が活動開始2周年を記念して開き、観光船コンチエルトを運航する「神戸クルーザー」(南部真知子社長)が飲み物を提供して協賛。宮城、福島県などから避難している約70人が参加した。

一行は、神戸市中央区の神戸ハーバーランドでコンチエルトに乗船。船内でジャズ演奏を聴いたり、デッキで夕焼けを眺めたりして楽しんだ。

宮城県女川町の自宅が

津波に遭い、同市須磨区で夫と暮らす高嶋光子さん(69)は「みんなと楽しい時間を過ごすのが前向きになれる」と笑顔。原発

事故の影響で、地元に残る夫と離れて4歳の双子の息子と福島県郡山市から同区に避難する主婦(37)は「いつ家族4人で暮らせるようになるのか不安だが、こういう場での思いを分かち合えて心強い」と話していた。

(宮本万里子)



船上でのひとときを楽しむ東日本からの避難者＝神戸港

支え人びと

兵庫⇄東日本

5

津波の映像を見て、心が波立った。すぐにも現場に行きたい。

「いつもそうなるねん。とにかく目で見て確かめて、自分でできることを決めたらいいよ」

だが、自制した。2004年、胃がんの手術で体力が落ちた。数日後、着の身着的のままの人々が兵庫に来ていると新聞で知る。「神戸でできること」が見つかった。

仲間と呼びかけ、3月末、避難者を支援する「暮らし

暮らしサポート隊 石東直子さん



都市暮らしサポート隊代表。阪神・淡路大震災ではコレクティブハウジングを具に提案し、10団地341戸を実現。神戸市在住。

避難者支援

「神戸でできること」続ける

サポート隊」を始めた。だが、個人情報の壁に阻まれる。自治体に尋ねても避難先は教えてくれない。

新聞記事を頼りに公営住宅を訪ね、チラシを配った。1回目の集いは6月。神戸市北区のしあわせの村で歓迎ピクニックを企画した。

宮城や福島38人が笑顔で語らい、子どもはボランティアの学生と原っぱを走り回った。「東北弁で安心して情報交換できた」「非日常から日常に戻った気分」。反応は予想以上だった。

自信がなかっただけに胸が熱くなった。「癒やし現場を作ることで、私たちも癒やされる。だから続ける会」。「放射能の勉強会」な

ケアの場と位置づけていた。だが、語らいの時間が避難者を結び、「語り合う会」。「放射能の勉強会」など思えるようになった」と初めて顔を見せる人。首都圏からは新たな自主避難者が増えている。避難をめぐる意見の相違で離婚してしまった人もいる。

だと思つた

月1回の「みちのくだんわ室」は、兵庫を知ってもらおうと、淡路島や明石の公園やレストランなど毎回会場を変える。気分転換できる場所とおいしいお菓子だけを用意し、後は自由にしてもらつた。2年間で参加

どの自主活動が生まれた。既に20家族が古里や周辺の町に戻った。「共助から自立へ。これが私たちの『理念』やねん」

根底にあるのは阪神・淡路大震災後、都市プランナーとして行政に提案したコレクティブハウジングの発想だ。月1回の集いは「好きなきに集まれる『協同の居間』のようなもの」と話す。

「一方で、今も心配事は多い。「やっとならしたい」と思えるようになった」と初めて顔をみせる人。首都圏からは新たな自主避難者が増えている。避難をめぐる意見の相違で離婚してしまった人もいる。

「必要とされているから、あと1年は続ける。その先は避難者の皆さんと私たちの状況次第」

身の丈に合った支援が続く。

(木村信行)

〓おわり〓

東日本大震災2年